

記念講演

ロータリーと私

R.I.会長代理 千 宗室



一人二役をさせていただくのは、もう大変なことで、会長代理だけでも責任は重たいのでございますが、会長代理が決まる前から山崎ガバナーから記念講演のご依頼を受けておりましたので、お約束をした次第です。その時はまさか会長代理が回ってくるとは思っておりませんで、会長代理が決まり、その後、記念講演はどなたか別の方にでもと申しましたが、「いやいやそれは裸の千宗室という意味で、ぜひロータリーというものを中心にした、お話をしてもらったほうが、かえっていい。ぜひそれを願います」ということで、お言葉に甘えまして、実は記念講演もお受けすることになったわけでございます。

今から18年ぐらい前、ガバナーを終え、パストガバナーになりましたときに、初めて会長代理で、鎌倉が主催されます横浜の地区大会に出て欲しいという指示を受けました。ところがその時、たまたま講演をされる方が急病になられ、ガバナーは次の講演者をお願いされたのですが、その講演者もまたご都合が悪くなり、講演ができないということになりました。私のあとで理事をやられた蔵並さんが、そのときのガバナーであり、どうしたらいいだろうと、ご相談においでになりました。ちょうど2日前ぐらいのことでしたが、いっそのこと、会長代理が講演までやっていただけますかということで、それじゃもういたしかたないと、その時も、記念講演も一緒に、お受けしたことがございます。

こういうことはよくあり、ガバナーの皆様の中にも、ご経験のあった方もおありと思います。また、これからガバナーになられるノミニ、エレクトの皆さん方も、そういう事態を予測されまして、必ずピンチヒッターを2、3、お決めになっておいたほうが無難であると思います。

さて、今ほど小谷直前理事から会員増強、あるいは退会防止についてのお話をお受けになったように、当地区では会員数は減っております。しかし地区では一番多数の91クラブを擁しているわけでもございます。それだけにガバナーの公式訪問、ある

いは行事なども大変で、1府3県、ガバナーが公式訪問される時、例えば私などは地元の京都はあとに回しても、先に遠方の福井や、あるいは和歌山に近い奈良の端のほうから、ぐるぐる回って行かなければいけない。当時、私がガバナーに出ておりましたころは、交通も不便で、道路事情も非常に悪かったわけでございます。

今から25年前、当時はまだ紅顔の美少年とまで行きませんが、多少、50歳になるかならんかという、最年少のガバナーで、意欲的に歩きました。しかし、どうしても泊まらなければならないこともあり、当時、小谷直前理事が私の幹事長を勤めてくれており、小谷君とずっと一緒に公式訪問をいたしたことが、つい昨日のように思い出されるわけでございます。

そんな時代で、私はいつの間にかロータリーのメンバーからロータリアンになってしまったのでございます。

私がロータリーを意識したのは小学校の5年生ぐらいです。昭和6年頃、私の父が京都のロータリークラブに入会いたしました。いつも夜、食事のときなど、奉仕の理想の歌を唄って聞かせてくれたり、家族会によく連れて行ってくれました。

当時、京都ロータリークラブと申しまして、会員数が30名ぐらいで、右を見ても左を見ても、家族会などでは知り合いの人たちばかりであり、学校も1年上とか2年下とか、そういうような人たちが多かったです。

それが現在、同じ京都のロータリークラブのメンバーになっているわけでございます。親子揃って、あるいは、私などは伴も入っておりますので、3代揃ってロータリーのメンバーになっているわけでございます。

小学生の5年生の頃、父に、「ロータリーっていったい何なの？」ということ質問したのです。すると父が、「ロータリーっていうのはな、自分の職業をよく認識して、その職業を通じて、人様のため

になることをするんだよ。そういうことができることをトレーニングする場所だよ」と、そのとき初めて教えてくれました。「ああ、そんなもんかな」と、実は思っておったわけです。

そのうちに、戦争が始まり、確か昭和16年ぐらいになりますと、ロータリーは敵勢国の社交クラブであるから解散しろということで、国際ロータリーから脱退し、ロータリーという名称も止めました。京都では「水曜会」という名前で、まったくロータリーの色は伏せてしまったのですが、戦争中も週1回の例会が月2回ぐらいに減っても、ずっと続けていたわけでございます。そして戦後、ロータリーにまた再編成され、昭和24年に京都のロータリークラブも国際ロータリーに復帰するという経過があったわけでございます。

当時私はロータリーは、ひとつの奉仕団体ということぐらいしか、思っていなかったわけです。

その後、京都に青年会議所ができ、勤められるままに、昭和27年頃、小谷隆一君などと一緒に入って、会議所運動に没頭したわけです。そのときの青年会議所の目的は、まず友情。友情を深めるためには親睦。そして友情と親睦を元にして地域社会に奉仕をしろという、その3つの柱が信条でありました。

ところが、青年会議所は何かお坊ちゃんクラブであるとか、JCという頭だけとって、ジャズクラブであるとか、いろいろと端から言われるわけです。父も、「青年会議所もええけれど、あんたもいつかはロータリーに入って、ロータリーで勉強したほうがいいぞ」と言われておりました。けれども、当時は青年会議所のほうが面白かったので、小谷君達と一生懸命、せっせと会議所に足を運んでおりました。そして青年会議所の理事長になり、いよいよ青年会議所運動から離れられなくなったわけです。

当時、青年会議所は、今のように日本全国でもロム数だけでも520ぐらいあり、メンバーも10万人近くありました。しかし青年会議所といえども、今日はメンバーがだんだん減ってきているそうで、ロータリー、ライオンズが会員が減っているというのと同じように、組織というものは今、こういう時代に必要なのか必要でないのかということまで、極端にいうと議論される時代になってきたような感があります。

ところで私が青年会議所に入って一番よかったことは、やはり全国的な人間どうしの繋がりでございます。どこへ行かなくても、いろんな方々と友情の繋がりを持つことが、素晴らしい人間形成の上に役

に立ったことでございます。

さて、私がロータリーに入ることになりましたのは、昭和29年に京都クラブのアディショナルクラブとして、もう一つ京都にクラブをこしらえなきゃいかん。そこで、京都の南に一つクラブを作るというようなことになったのです。

当時のガバナーは、京都大学の名誉教授であった鳥養利三郎という大変怖い方だったそうであります。そのガバナーからキーメンとして指名を受けたのが月桂冠の大倉さんと、吉田忠さん、そして私の父で、若い人たちを集めなきゃいかんという方針になったわけでありました。そこで吉田さんと大倉さんと父が集まっているところへ呼び出され、「今度南に京都南ロータリークラブをこしらえたい。だからあんたもキーメン、チャーターメンバーになんなさい」と言われたわけです。もう寝耳に水でございました。

私はちょうど青年会議所の理事長に次はなるというときで、理事長をやらなきゃいかんのに、京都南ロータリークラブのチャーターメンバーになったら、その理事長ができなくなるんじゃないかと。そこで父に断りを入れたのですが、もう至上命令であり、当時は嫌々ながら、南ロータリークラブに入ることになりました。

27名のチャーターメンバーで発足したのでございますが、私はアメリカに留学したり、海外的な経験を持っているということが知れておりましたので、初っぱなから理事を命ぜられ、国際奉仕委員長をやらされました。

ところが、京都青年会議所の理事長をしながら、南ロータリークラブの新しい組織の理事として国際奉仕委員長という役目を持たなきゃならない。もうこれは大変なことになったのです。

当時、会長は京阪電鉄社長の今田さんという、なかなか豪快な方で、私は今田会長にお断りを申し上



げましたが、「ロータリーも青年会議所も同じ修練の場や。だから両方やってやれんことないやろう、やりなさい」ということを言われました。そこで、副理事長を引き受けていた小谷隆一さんに相談し、「あんた何とか助けてくれるか」と言ったら、小谷さんは「それはもう当然、私が補佐しますから、南クラブへお入りなさい」という勧めもあり、昭和29年から昭和39年までの10年間在籍をいたしました。

その間、メンバーも34人、あるいは40人と、だんだん増えて行き、私も副会長までさせていただいたわけです。

銭勘定が非常に苦手な私に会計までやれといわれたときは、大変困ったのですが、副会計を置いてもらうことで、どうやら会計を難なく過ごすことができました。

ところが、昭和39年に先代が急逝いたしました。先代は70歳で、まだまだ活躍してくれと思っておりましたのに、クモ膜下で、15分間であっという間に逝ってしまいました。

そのときは、もう大変困却し、ロータリーも何もかも辞めて、これからは家元としての仕事に専念しなさいかんと。

先代はよくボケーショナル、ボケーショナルと申しておりましたが、私は意味が分からず、聞きましてところ「これは天から与えられた職務という。自分の仕事ほど尊いものはない。ありがたく思って自分の仕事に専念しなさい。自分の仕事に専念することが、また奉仕ということに繋がるんだ」ということを言われておりました。

まあ、ここでひとつ乾坤一擲、いろんなことを学ばせてもらったので、これからはもっと茶の道に専念しなさいかんだらうと思ひ、南ロータリークラブの退会を申し入れたのです。

ところが月桂冠の大倉さんと吉田忠さんが、南クラブを辞めたのなら、お父さんのあとが空いているから、京都クラブに来なさいということで、そのまま横滑りに京都クラブに持って行かれました。

京都南ロータリーはできるときに、若い人を集めたので、最初の27人のメンバーの中で、青年会議所出身の人が7名ほどおり、その7名が非常に意気軒昂でございました。中にはバスタガバナーをされた息子さんもおられ、いろんな意味において、ロータリーを改革しないかん。改革するために我々は南クラブに入ったんだから、ひとつ京都クラブを困らせてやろうと。

たとえばガバナーが公式訪問に来られると、何か

理屈を捏ねて、嫌らしい質問をして、ガバナーに京都南クラブというのは、けったいなクラブやなと思わすほうがええねやないかというような具合でした。つつい私もその口車に乗り、先鋒の1人となって、ロータリーを分からんなりに改革しようと言っていたわけでございます。

古老方から言わせると、本当に生意気な存在であったらうと思いますが、そのときの古老方が偉かったのは、我々7人の若い者が言う、勝手な言い分を、みなよく聞いていただくんですね。

そして聞いてから、「よしそんなこと言うなら、いっぺんあんた方だけでやってみろ」と、古老方から言われたのです。そこで7人が集まり、それならこれから我々が京都南ロータリークラブを背負ってやろう。そんなら会長は誰がやんねやと。幹事は誰がやんねやというようなことまで、シャドー内閣みたいに、机上の空論でいろいろ話し合っていました。しかし誰も会長になり手が無い。幹事も勘弁してくれ。「わし忙しい」と、ふたこと目にはこの言葉が出る。当時、34、35歳ぐらいで、もう意気軒昂といえば軒昂でございましたが、みんな現役の仕事の第一線に立っている者ばかりでございましたから、仕事のほうが先に立って、口ほど自分の行動力をロータリーに対して捧げることができなかつたのです。

そのうち古老方が、「口と実践、これは違うねん。もっと例会に出て勉強しなはれ」と、釘を刺されました。それで、7人の侍は、しばらくはおとなしくなつたわけでございます。

そんなおり、ワコールの塚本幸一君を私が推薦し、南ロータリーに入れたわけでありました。またこの塚本幸一君というのは、何もロータリー分かんままに入ってきたわけで、ビルマ戦線の生き残りの5人のうちの1人という意気軒昂な男です。「ロータリーっていったい何をすんねや」と、いうところから始まったわけでありました。

それで仲間内で、一杯飲みながら「ロータリーって、自分の職業を通じて地域社会のために奉仕すんねや」「そんなこと分かっとなねや」「地域社会に奉仕するって、自分1人でできんやないか」などと話をしました。そこで、金だけ出すというのはロータリーやない、自分が率先躬行して、手を染めて何かやるというところにロータリーのよさがあるのと違うかと、塚本君が言いましたんで、もっともそうやと。それでは具体的にどういうするか、京都クラブの真似をするのでは面白くないと。京都南クラブ

の、ユニークな存在価値をアピールしようやないかと、というようなことになってきたわけでありました。

そのうちに、京都では東、北、西とロータリークラブができてきて、南ロータリークラブは、アデシヨナルクラブとしては一番兄さんクラブになったわけです。そこで空論ばかり振り回しておらず、ロータリーの本質を、哲学を勉強しようということで、京都ロータリークラブが中心になり、東西南北の若いメンバーに呼びかけて勉強会をすることになりました。月に1回ずつ集まり、いろんな先輩ロータリアンを呼んできて、話を聞く会をしたのでございます。

当時、京都クラブのメンバーに大変なお茶人でもある丸物百貨店社長の中林さんがおられ、その丸物百貨店の2階の特別食堂が南クラブの例会場になっていました。中林さんは、自分の丸物百貨店の特別食堂がロータリークラブの例会場になった以上、毎週出す料理は全部自分がチェックすると、大変気を遣われ、自分が前の日に食べて、これならよいというものをお出しいただいてたわけです。ですから、もう会費をオーバーしてしまうほどのごちそうで、当時我々のところにはメイキャップにこられる方々が多かつた。それもごちそう目当てにこられるメイキャップが多かつたのです。

あるとき、これでは会費が安すぎるから、値上げしようかという話が出ました。当初は我々南クラブしかなかつたので、いちいち京都クラブにお伺いを立て、少し値上げしてよろしいかと言いましたら、京都クラブの会長さん方もご承知で、「あれではちょっと安すぎる」と。「会費を上げるわけにはいかんから、料理の質を落としてもらえ」ということになりました。

ちょうど私が幹事をやっており、中林さんに申し上げましたが、「いやいや、ここでやってもらう以上は、そんな質を落とすわけにいかん。今まで通りでよろしい。会費を値上げせんでもよろしい」ということで、ずっとやってきたわけでございます。

さて、いろんな先輩方のお話を聞くことは青年会議所、ロータリーを通じて教えていただいたわけで、そうでなかったら、なかなか人の話を聞くということではできません。毎月例会後、先輩ロータリアンを呼んでの特別のアッセンブリーでは、いろいろ質問させてもらいました。例えば、京都ロータリーの西村大治郎さんはなかなか先進気鋭の方で、お話を聞くのも大変楽しみで、随分いろいろご指導を当時受けたものでございました。

ところが、昨今、卓話が始まる前になると、もう

だつと立って、スピーカーに対して大変失礼な態度をとられるロータリアンが、各クラブで随分見受けられます。よほどの用務がない限りは、やはりお話を承り、聞かせていただくことが、自分の勉強になることなのです。

わずか30分、1週間に1ぺん勉強できる時間を取ることができるのは、非常に幸せだということを、思わなきゃならぬ。

また、食事のとき、いろんな方と握手したり、お話を交わすことによって、相手を知り、自分も相手に知っていただくことが非常に大事なことです。

よく先輩のガバナーが申されておりましたが、ガバナーの公式訪問で、クラブへ行くと、会長の顔を見ただけで、クラブの様子が分かるというんですね。それはどういうことかと言いますと、小谷さんがさつき終わりのほうでお話になっていた、エリートとかロータリアンということをも自分自身で考えなさいかんということです。そしてエリートの中身は謙虚だということを、まず思わなさいかんということです。

人間はやっぱり謙虚になるということが大事であります。かつて大阪のロータリークラブのメンバーだった松下幸之助さんが、京都北ロータリークラブに来られました。

たまたま私が北クラブにメイキャップに行きましたら、そこへ松下幸之助さんが突如として来られたんです。私はよく存じ上げておりますので、松下さんとお話しながら会長に紹介しようとしたところ、松下さんは、自分でポケットから名刺を出されて、そして会長に、自分自身で名刺を渡され、「松下幸之助でございます。よろしく願います」と、自分から頭を下げられた。経営の神様、偉い人だという方が、先に名刺を出して、「松下幸之助でございます。よろしく願います」と。

会長はもうびっくり仰天し、また松下幸之助さんが来られたというので、わつと寄ってきたみんなに対しても、松下さんは名刺を1人ずつ渡して、「松下幸之助でございます。松下幸之助でございます」と、まるで選挙みたいに一生懸命頭を下げておられました。

私はその姿を見て、ああここに人間松下幸之助という、素晴らしい人間味というものがあるんだということ、しみじみ勉強させていただいたのです。

仕事の上においても何においても、それぞれの方々は自分自身に誇りを持っておられます。そして、あるときには大きく見せようという気持ちが、ある

わけで、それはそれで結構です。しかし自分が一步下がって、謙虚な気持ちを持つことができこそ、はじめてエリートという、ひとつの言葉の裏付けができるんでなかろうかと。

謙虚な気持ちを持たないでエリートだという気持ちを持っていたら、これは大間違いだと思うのです。ロータリーのバッチを付けさせていただいているだけで、自分は何かも雲の上の人になったというようなことであったならば、これは大間違いだと。

天気の日が晴れてよかったなど、天道様に感謝を捧げる。雨の日が傘をさしながら、この雨がまた慈雨の雨になってくれるようにと。そしてまた雪のときには、この雪がいろいろ雪害を起こさないように。そしてまた五穀豊穡を天候によって祈るということが、人間にとってできること。そういう人間であることは、ロータリアン以外でも、ささやかな仕事をしている人たちの中に多くおられると思うんですね。

ロータリアンが偉いんじゃないくて、ロータリアンでなくても、人間として自分ができるということが、大事な人間性のあり方ではなかろうかと。じつは最近、歳を取ってくるにしたがって、そういうことを思うようになったわけでありませう。

自分が冷静に一步下がってものを考え、思い、そしてゆとりの心を持つということです。ゆとりの心を持つことによって、この物質本位、また人間本位、自我のいわゆる世の中に対して、せめてロータリアンがお互いに手と手を握り合って、小さな輪から、

素晴らしい人間どうしのふれあいというものを作っていくならば、そこには差別、差別も何もありません。みんなが平等の中で、お互いに語り合い、そして大きな人間性の魅力というものを、素晴らしい世の中のために尽くすということをして行くことができたならば、私は平和というものが大きな礎を作るものであると信じるわけでございます。

皆さん方が一緒にポリオのワクチン授与のために行かれ、大変な努力をなさったわけでありませう。バヌアツでは2週間にわたる大きな仕事をなさって来ました。

尾身先生にポリオのお話をさせていただきましたが、2月のトラスティ会議のときに、2650地区を上げて、西太平洋地域におけるポリオ絶滅の宣言に対して、国際ロータリー財団は深甚なる敬意と謝辞を称するということをおっしゃっていただきました。

世界人類の平和のために、皆様方の、なお一層の献身的な、ロータリーを通じて、また人間としてできること。そういうことに私は奉仕の理念というものを、もっともっと尽くしていただくということこそ、私は真のロータリーというものを、地域社会の方が認識していただけることになるのではなかろうかと、感ずるのでございます。ご静聴ありがとうございました。

(終了)

●プロフィール●

ロータリー財団トラスティ 千 宗室
 茶道裏千家家元。千利休居士より第15代。
 同志社大学法学部卒。ハワイ大学修学。哲学博士

1989年 文化功労者顕彰
 1994年 勲二等旭日重光章受章
 1997年 文化勲章受章

〈ロータリー歴〉

1954年 入会 京都市南ロータリークラブチャーターメンバー
 (1965年より京都ロータリークラブへ)
 1972年～73年 京都ロータリークラブ会長
 1975年～76年 国際ロータリー第2650地区ガバナー
 1976年以降 地区諮問委員、地区委員長歴任
 国際ロータリー会長代理 (20数回)
 国際ロータリー広報委員会委員、選挙管理委員会委員

国際ロータリー国際大会・地域大会執行委員
 国際ロータリーグループリーダー、カウンセラー等歴任
 規定審議会代議員
 マルチプルボールハリスフェロー、
 ロータリー財団特別功労者
 ベネファクター、米山功労者
 1988年～90年 国際ロータリー理事
 1991年～92年 国際ロータリーピースカンファレンス委員
 1992年～94年 国際ロータリー会長インフォメーションカウンセラー
 1994年～96年 国際ロータリーアジア地域大会執行委員、会長選挙管理委員
 1996年～97年 ボールハリス没後50年記念事業委員
 1998年～2002年 ロータリー財団トラスティ
 1998年～99年 ロータリー財団アジア問題委員会委員
 1999年～2000年 ロータリー財団プログラム委員